

現代中国の民族問題と「中華民族」

杉山 文彦

はじめに

冷戦体制崩壊後、世界は民族紛争の時代に入ったと言われる。世界各地で民族紛争が続発し、先進国であると発展途上国であるとを問わず、多くの国が様々な形の民族問題を抱えていることが、人々の目に明らかとなってきた。これは一面では、旧ソ連東欧圏の例で明らかなように、問題を覆い隠してきた超大国どうしの軍事的対峙という重しがとれたことによっているが、より広く見れば、19世紀から20世紀にかけて世界史的に流行した国民国家の体制が、以前の様な有効性を持ち得なくなってきたことの現われとみることもできよう。民族問題に関しては、56民族から成ると言われる中華人民共和国も、当然その圏外にいることはできない。本稿では、中国の民族問題を、「中華民族」という、近年中国で民族を論ずる時に必ずといってよいほど登場する語を検討する事を中心に考察してみたい。

(一)、民族問題の背景

56の民族より成る多民族国家と言われる中国であるが、その内で漢民族の占める割合が人口の90%以上、55の少数民族は10%に満たない。しかし、それでも彼らの総人口は1億近くになり、居住する地域面積は国土の50%以上におよぶ。しかも、中国の民族問題をめぐっては、以下のような軽視できぬ点が指摘されている。

1. 少数民族とされる者の中には、モンゴル人、チベット人、ウイグル人、等の様に漢民族と対峙した長い歴史を持ち、文化面でも漢民族とは異質な、それ自体ある種の普遍性を主張し得る世界観を持った集団、言い換えれば、伝統的な東アジア文明圏の外にあって別の伝統文明を持った集団が存在する。しかも、彼らの人口は、いずれも数百万を数え、世界的に見れば、人口の面だけ言えば十分に一つの国民国家を形成し得るものを持っている。事実、これらの民族は、中華人民共和国建国以前から、独立国家建設への動きが度々見られ、現在でも自治権拡大への動きが続いている。
2. 改革開放政策下での市場経済化は、少数民族社会にも急速に浸透している。市場経済はそれ自身の持つ合理性によって、社会的、経済的、文化的一元化を進める。しかし、このことは少数民族から見れば、「漢族化」を意味し、少数民族社会にアイデンティティ・クライシスが生じ漢民族への反感が強まる。
3. 中国の少数民族の中には、周囲の諸国と国境越えて居住している集団もあり、國際情勢次第では國際問題に発展しやすい面を持っている。
4. 中国の民主化問題・人権問題との関連で少数民族の権利の問題が、国際的に問題とされる。
5. 漢民族とされる集団の中でも、台湾や香港の住民のように、漢民族の一員としてよりも、

台湾人、香港人としての自己をより強く意識する集団が現われている。今のところこの現象は、台湾・香港という特別な地域に限られているが、漢民族社会の言語、生活習慣の多様性を考えれば、今後の政治、経済の動向次第では、他の地域に広がる可能性も否定できない。

もとより、これらは単独ではなく複合的に作用するものである。中でも、市場経済化の進展は、人々の物質的欲望を刺激して肥大させ、その肥大した欲望を満たすためのより合理的な手段を提供するものであるだけに、抗し難い力を以って少数民族社会を巻き込み、民族問題発生の大きな背景を成すものと考えられる。

もっとも、市場経済化による閉鎖的な地域社会の解体と一元化は、近代的な開発が進んでいないすべての地域に言えることであって、必ずしも少数民族地区に特有のことではない。また、少数民族自身が、主体的に市場経済化にかかわっていくことも、可能性としては考えられる。しかし、現実には中国の少数民族は、(その民族構成員の多くが都市住民である満州族のような例外もあるが) その大半が、いわゆる経済的後進地域に居住し、相対的に閉鎖した伝統的共同体を成して暮らしてきたのであって、その彼らが、すでに市場経済において百戦錬磨、広いネットワークとそれなりの合理性、普遍性¹をもって活動する漢族社会に対抗して主体性を保つことは至難の業というほかあるまい。しかも、市場経済によってもたらされる近代化は、同化と同時に人種差別、民族差別といった近代社会も未だ十分には克服し得ない、というよりも近代社会にも固有であるかに思われる不合理性を持ち込んで来る。このため少数民族地区は、市場経済化の進展による負の現象が、集中的に現われやすい場所といえる。自己決定権の強化が叫ばれる所以である。

この市場経済化にともなう問題は、言わば現代中国の民族問題の通奏低音を成す部分であって、この上に、状況によって、様々な民族問題が形成される。

(二)、「中華民族」の登場

現行の中華人民共和国憲法は、その序言の冒頭で、「中国は、世界で歴史の最も悠久な国家の一つである。中国の各民族人民は共々、光輝燐然たる文化を創造し、光栄ある革命的伝統をもっている。」と謳い、「中華人民共和国は、全国の各民族人民が共同して造りあげた統一された多民族国家である」という一文を後半部分に入れている。中国の憲法は、1949年の『共同綱領』以来、数回変わっているが²、そのいずれもが序言で、反帝国主義、半封建主義の階級闘争を強調した社会主义建設を謳い上げている。そこでは、中国近代史への言及は度々なされてきた。しかし、中国の悠久の歴史、燐然たる文化という表現が入ったのは、現行憲法の基本が固まった82年憲法からである。また、「多民族国家」という表現は、以前は条文の中に見られたが、82年憲法からは、序言の中に入っている。このように中国の憲法は、82年以来、それ以前に比して民族の要素を強く打ち出したものとなっている。これらは70年代末より始まった改革開放政策に伴って、それまでの階級闘争と革命的インターナショナリズムにかわり、新たな国民統合の資源として民族主義がとりあげられたことを意味している。しかし、中国は多民族国家であり、民族主義の強調は大漢民族主義を助長し、民族対立を煽ることになりかねな

い。そこで中国は、一方で民族主義を強調しながら、他方では多民族国家であることを強調し、その双方を共に国民統合に動員するという難しい作業を強いられることになる。

この難しい問題に答えるためであろう、中国における最近の民族論議でよく持ち出されるのが、「中華民族」という表現である。「中華民族」という語そのものは、清末より使われ始め、孫文、蒋介石、毛沢東等によっても、その政治的発言の中で用いられてきた。³しかし、その内容は実質的には大漢民族主義と大差のない場合もあり、「中華民族」が意味する所が、民族論としてつきつめられることは、長い間ほとんど無かった。しかし、80年代に入り、中国を代表する社会学者費孝通がこの語を用いたあたりから、民族議論で盛んに用いられるようになり、今や中国の民族論の中心になった感さえある。ではその「中華民族」とは、どのような意味を持つものなのであろうか。ここでは、中国政府の公式の立場を代表すると思われる高等学校法学教材『中国民族法学』⁴から見てみよう。

同書は、その緒論第1節「中国は統一された多民族国家である」の中に「中華民族」の項を設けている。それによれば「中華民族とは、中国国家を象徴するものであり、中国の各民族が共同して組織した、多元一体構造の民族共同体である」⁵と定義されている。さらにまた「中華民族と中国は同義である」⁶とされている。そして、中華民族、中国という呼称は清末よりのことだが、実際には、秦が多民族を統一した中央集権国家を建立した時からすでにその形成は始まっており、古代以来、歴史の発展段階を経て発展してきた。しかし、中国の人々が「中華民族」として自覚を持つのは、近代になって列強の蹂躪を受けた下での抵抗を通してであり、共産黨の指導と毛沢東思想によって、はじめて「中華民族」に対して明確な概念が与えられた。以上のようなことが毛沢東の文を引用しながら説明されている。中に費孝通の

中華民族の多元一体構造の形成過程は、その主たる流れは多くの分散孤立した民族が、接触と混合を経て結びついたり融合したりし、同時にまた分散したり消滅したりすることを通して、相互に往来し混ざり合いながらもそれぞれが個性を持った多元統一体を形成するものである。これは、世界各地の民族形成の共通したプロセスである。⁷

という一文の引用があり、これによって「中華民族」の説明としているものと思われる。比喩的な表現を借りれば、「中華民族」の形成過程を、インクが紙の上を拡がっていく様にとらえるのではなく、川が多くの支流を集めながら大河となって行くように理解すると、その意図するところが分かりやすくなるであろう。

今見たように、ここでは一応歴史的背景から説明する形がとられている。しかし、この「中華民族」が、実態を反映したというより、政策的要請に答えるためのものであることは、明らかである。論者たちも「中華民族」なる実体があると考えているわけではあるまい。「中華民族」は統合目標として掲げられたものなのである。少々乱暴な言い方をしてしまえば、そもそも「民族」なるものは、なに程か国民国家形成のため政策的に掲げられたものという面を持つのであって、その実体は後から隨いてくるという例はいくらもある(例えば、江戸時代の状況からすれば、琉球の人々が日本人になる必然性は無い)。その意味では、実体を持たないことを以って

「中華民族」をただちに否定し去ることは、必ずしも適切ではない。しかし、民族はどう考えても合理的契約によって作られるものではない。民族は過去から連なる運命共同体であり、民族主義の効用は運命共同体の凝集力である。民族に必要なものは契約ではなく神話、叙事詩、民話、歴史などによって構成される物語である。したがって、問題は「中華民族」によって凝集力を持った物語が書けるか否かである。また、より根本的には、21世紀をむかえる今日にあってなお、民族物語によって人々を統合することが、あの国に暮らす人々、さらには周囲の国々に暮らす人々の幸福に益するか否かであろう。

(三)、「中華民族」とは何か

「中華民族」を以って民族物語を書き、それによって国民統合を行うことは、はたして可能であろうか。結論から言えば、それは不可能とは言い切れぬまでも、相当に無理な行為であって、かなりコストの高い物語となってしまうであろう。

「中華民族」は中国国内の56民族全てによって構成されることになっている。そうすると、モンゴル人やカザフ人等のように、国外にも同じ民族がいて、その中には独立国を成しているものもいるが、その様な場合は同一民族でありながら一方は中華民族で他方は非中華民族ということになってしまう。しかも、国境をまたぐ集団には、言語、生活習慣といった共通の民族実体があるのに対し、「中華民族」の方にはさしあたってこれといった実体が無い。これで「中華民族」の物語に参加せよというのは、かなり無理な注文であろう。もっとも、この点については、同系統の民族によって構成される国家が大西洋を挟んで成立していること、またヨーロッパ内でもドイツとオーストリアが同様の関係であるし、さらにドイツ系、フランス系、イタリア系、ロマンシュ系の4グループから成るスイスの様な例を考えれば説明がつく。しかしそれを言えば、「台湾は中華人民共和国の神聖な領土の一部である。祖国統一大業を完成することは、台湾同胞を含む全中国人民の神聖な責務である。」⁸として、絶対に台湾の独立を認めないことと矛盾する。(日本による植民地支配という事情はあるにしても、現に台湾住民の大半は大陸との統合を望んでいないのであるから。)

次に、そもそも「中華民族」なるものに何らかの実体を持たせ得るかどうかの問題である。北京や上海の空港の売店にある民芸品売り場に行くとカラフルな民族衣裳を着た小さな泥人形を56体並べて箱に納められた物を売っている。⁹ 箱の蓋の上には「中華民族」と書いてあるが、中に入っているのは漢族と55の少数民族であって、「中華民族」の人形は無い。このことが「中華民族」の本質を、何よりも良く物語っているといえる。

56民族を統合したものが「中華民族」であるということはできる。しかし、統合するとはどういうことか。人口比に応じて結合すれば、90%を占める漢民族の色合いが非常に濃くなつて事実上の漢民族化となってしまう。一方、56民族の文化的特色を統合したとすれば、どうなるであろうか。例えば、様々な民族衣裳を総合した上で、「中華民族」はどのような民族衣裳を着ることになるであろうか。これは結局全ての色の光線を混合すれば、無色の光になってしまうのと同様であって、「中華民族」の特色は、ほとんど無色透明なのであり、その人形は作り

ようがないのである。「中華民族」は具体的な姿を取り得ない抽象的な理念に止まらざるを得ない。「中華民族」論議の度によく引用される費孝通の上記の言葉も、民族融合一般を説明するものであっても「中華民族」の説明にはなっていない。「中華民族」は明らかに民族物語の主人公に不適切である。

「民族」という語はどうしても血縁、言語、文化といった、その成員にとって選択以前、契約以前の要素が欠かせない。民族はこの意味で運命共同体を性格の基本とする。そのため民族には、例えば民族衣裳を着た人形の様に、そのイメージを喚起する物がどうしても必要になる。論理的に考えられただけの共同体は契約の産物には成り得ても、運命共同体ではあり得ない。「中華民族」には独自の人形が無いのであるから、論理的に考えるしかない。これでは民族としては失格である。この意味で、中国は本来、「中国国民」というべきところを「中華民族」と表現し、「国民」の語を避けて「民族」という表現を固執しているとする毛里和子の指摘は、本質を突いている。毛里氏によれば、中国では建国以来、国家の扱い手としては「人民」もしくは「公民」という表現が多く使われ、「国民」は使用されなかった。それは「国民」は内に階級対立を含み、「人民」と「人民の敵」とに分けられるからである。このため「国民」という語は現代中国語として十分に定着しなかった、¹⁰ ということである。

(四)、「漢民族」と「中華民族」

「中華民族」は、民族的なイメージに乏しい。にもかかわらず中国では、それが民族論議の中心になった感さえある。それは何故であろうか。もとより、そこに国家統合の強化に民族意識を利用するという政治的動機が働いていることは言を待たない。しかし、本来民族とは言えぬ「中華民族」の民族意識を高めて、それによって国家統合を謀れば、そこには様々な無理が生じ、統合のコストが非常に高くなってしまい、政策的に逆効果になってしまうことが、十分考えられる。それにもかかわらず「中華民族」が強調されるすれば、「民族」をめぐって、中国には何か特別な事情があり、それが原因となっていると考えるべきであろう。

ここではまず考えておかねばならぬことは、「国民国家」中国の世界に類を見ない特殊性である。中国は前近代における世界帝国から、ほぼそのまま領域を受け継いで近代の国民国家と成了（というよりも成ろうとしている）ほとんど唯一の国である。似たような例としては、ロシア帝国からソ連さらにはロシア連邦となったロシアがある。しかし、ロシアの場合は世界帝国と言っても、必ずしも世界の真の中心であったとは言えぬ事情がある。彼らの宗教はロシア正教であるが、イエス・キリストはロシア人ではない。キリル文字もロシアには外来文化である。それにピョートル大帝以来、西欧化の歴史もある。これに対し中国の場合、孔子も中国人ならば漢字も自前、古代以来、常に文明の中心として周囲に影響を与えていたと自負できる立場にあった。ロシアの場合、世界帝国の時代からすでに、ロシア人は自分たちが必ずしも全ての面で文明の中心ではないことを、従って絶対ではないことを自覚していた。ロシア人は国民国家となる以前から、世界帝国の支配者でありながら、同時に「民族」でもあり得たのである。これに対し中国人は、世界的な国民国家建設と植民地化の流れの中に巻き込まれるまで、ずっと

と「民族」となる機会を持たなかった。

近代以前にあって、中国人は自らを「中華」とし周囲の人々を「夷狄」として、強い自意識を持っていました。しかし、これは「民族」としての自覚ではない。中華と夷狄を分かつものは「三綱五倫」に代表される儒教的人間関係（人倫）に基づく社会制度、文化（礼樂）の有無であるが、これは民族文化の差異ではなく、文明が未開の分かれ目として意識された。すなわち、中華の民である漢民族は全ての価値を有する集団であり、周囲の諸民族はそれを持たず、中華を慕って、中華を学ぶ者、あるいは学ぶべき者とされた。中華は文化的概念であり、周囲の全ての者が慕い学ぶべきものであるから、中華には、本来血縁や地縁の要素は無く、普遍的なものである。従って、中華の担い手である漢民族は、民族文化の担い手では無く、民族を超えた文明の担い手であり、また一定の条件を満たせば、夷狄出身者でも文明の担い手と成り得た。そして、この様な関係は周囲の夷狄たちにも基本的に受け入れられていた。¹¹ 例えは次の例を見てみよう。

琉球国中山王臣尚灝、誠惶誠恐、稽首頓首して謹んで表を奉り上言す。

伏して以うに、皇圖は鞏固にして、萬年謨烈の長に綿なり、帝德は廣敷して、四海車書の盛を観る。恩は日表に流れ、咸譯を重ねて來朝し、澤は海隅に沛んにして、皆琛を貢ぎて贋を獻ず。臣民命に歸し、遐きも遙きも心を傾く。

欽んで惟うに、皇帝陛下は乃聖乃神、允文允武にして裳を垂れて治まり、危微精一之傳を得る。冕を端えて以って候甸要荒え極に臨立つ。臣灝は、蟻封の外吏、蛟島の微臣なるも世々天恩を荷し、敢て芹獻を忘れんや。謹んで陪臣向永昌、鄭擇中等を遣わし、虔んで微物を齎し、聊か、寸忱を表わす。伏して願わくは、大造無私、至誠息まず、覆載に生成し、悠久を乾坤に同じゅうし、博厚高明にして照臨を日月に媲わせば、則ち金甌益々固く、長く海晏んじ河清きを徵し、玉燭常に調い、永之に民安んじ物阜んなるを觀ん。臣灝、天を瞻み聖を仰ぎて激切屏營之至りに任うる無し。謹んで表を奉り貢を進め、以って聞す。

道光十二年八月初二日、琉球国中山王尚灝、謹んで上表す。¹²

これは、道光12年（1832年）に、琉球国中山王尚灝が、清朝の皇帝に朝貢の使いを出した時に、皇帝に提出した「表文」である。「表文」とは、朝貢に当たって提出される文書の中で最も重要とされたもので、いわば挨拶文であって、実質的な内容は無い場合が多いとされるが、それだけに、文を送る側と送られる側との儀礼的関係を端的に示すものとなっている。¹³ 一見して分かるように、隅々まで技巧を凝らした美文で綴られたこの表文は、「誠惶誠恐、稽首頓首して謹んで表を奉り上言す」で始まって、まず広大な領域を永きにわたって統治する皇帝の偉大な徳を讃え、その徳が四方に広がり、周辺の民がその恩に感じて貢ぎ物を持って皇帝の下に参上することを述べる。そして、琉球国王が自らを「蟻封の外吏、蛟島の微臣」と称して遙り、天恩に報いるため使を派遣することを述べ、最後に今後も朝廷の繁栄が続き、皇帝の徳が周囲に及び続けることを願って、終わっている。ここに見られる関係は一言でいえば、同質な者どうしの都（中華）と鄙（夷狄）の関係といえよう。

琉球にも独自の神々はいるし独自の建国物語もある。それにそもそも朝貢をするに当たっては、当然のこととして政治的、経済的利害打算が働くから、この文を書いた人々の精神世界が、この表文に表れたような世界観一色であったと単純に考えるわけにはいかない。しかし、民族神話だけは、エスニックな垣根を越えて自己を説明し他者と関係を結ぶのは困難であるから、圧倒的な中華帝国の文明を前にしては、儒教によった普遍的説明原理を導入せざるを得ない。ここに都鄙の関係が生じてしまう。都である中華は鄙である夷狄を教化の対象と認めて、その独自性を認めない。それに対し、鄙はさし当たって都から学習する以外に自己表現の方途を持たない。中華帝国と周辺の少数民族との関係には、あちこちにこのような都鄙の関係が生じたのであって、朝貢システムとか冊封体制¹⁴とか言われるものは、このような関係を基礎としていたものと考えられる。この体制では、夷狄は鄙ではあっても、決して中華と異質なものではなく、中華と夷狄の間は連続変化によって連なっている。そこには、本来漢民族もいなければ少数民族もいない。¹⁵

この体制は必ずしも万全であったわけではない。中華帝国の北方・西方には、チベット人、モンゴル人、ウイグル人等のように、中華の世界観によらずとも仏教やイスラム教などによって普遍的説明原理を独自に持ち得た集団もあり、彼らは本来、冊封の理念とは異質な存在であった。また、都による鄙に対する差別、抑圧もあったから、南方の少数民族の反乱も度々あつた。しかし、中華帝国の経済的、軍事的力が卓越している間は、それらは表面的化することなく、冊封体制は安泰であり、その間、中華は普遍を体現し、漢民族は民族となることは無かつた。その漢民族が、文字どおり民族の一つになってしまったのは、西欧近代文明という「自由、平等、博愛」を理念とする別の普遍が資本主義という強力な武器を携えて登場したことにより、儒教と漢字文化の中華文明が一つの特殊となってしまったからである。かつては、漢字を使い「三綱五倫」を守って生活することは、全ての人が目指すべき価値であったものが、今や、特殊な生活の仕方の一つとなり、そのような生き方をする集団が「漢民族」と呼ばれることになったのである。

言い換えれば、漢民族は列強の侵略（この列強の中には、日本も重要な一員として含まれる）のもとで、外的要因によって作られたという事になる。作るに当たって資源として活用されたものは、「中国4000年の歴史」であるが、文明の担い手であった歴代の中華帝国の歴史はエスニックな性格のものは少ない。エスニックなものを資源に民族形成を行なうことも、可能ではあるが、中国の場合それは、漢民族が多数のグループに別れる事を意味し、19世紀後半から20世紀前半の歴史状況の中では、それは中国の分割植民地化に直結し、実行不可能であった。しかも、「中国4000年の歴史」は、列強の侵略の下で大きく傷ついており、1910年代の「新文化運動」に見るよう、漢民族の形成過程は「中国4000年の歴史」への批判の過程でもあった。民族意識の形成期は、同時に民族として自己批判の時期でもあったのである。¹⁶かくして、漢民族とは「中国4000年の歴史」を拠り所としつつ、それを批判して近代化を進めつつあるもの、とでも言うほかないものということになる。

この様な性格の漢民族にとって「中華民族」とは、自己の発展形態として極めて自然なものであろう。一方、少数民族にとっては、これはかつての都鄙の関係の近代版に他ならない。し

たがって、もともと都鄙の関係になかったチベット人やウイグル人など、東アジア文明とは別の文明圏に属していた民族にとっては、受け入れがたいものであろう。しかし、其の他の多くの民族にとっては、歴史的に馴染んだものである。異なる点は、かつては理念においても現実にあっても、中華がインクが紙上を広がるように拡大し少数民族が同化される過程であったものが、今度は少なくとも理念上は、川の流れが合流するように共に自己の特性を保ちつつ発展して「中華民族」を形成することになっている点で、関係としては一步前進となっている。現状では、発展=近代化は漢民族のチャンネルを通して入って来るから、少数民族が近代化を拒否せぬ限り、そこには必ずしも都鄙の関係が生ずる。この様に「中華民族」と言う一見奇異な民族論も、中国の状況の中に置いてみると、それなりのアリティーを持つのである。ただし、かつての中華と異なり、近代化は漢民族の独占物ではないから、少数民族が漢民族以外のチャンネルを活用するようになれば、「中華民族」は意味を持たなくなることも考えられる。

(五)、中国における「民族」と「国民」

「中華民族」という後の背景には中国独特の民族関係があり、それによれば「中華民族」も必ずしも奇異ではない。しかし、実質的には「中国国民」と言った方が自然なものであることは明らかであるから、何故あえて「民族」の語を使い続けるのかは、依然として疑問が残る。そこには、すでに指摘された現代中国語における「国民」と「人民」との関係のほかにも、更に別の背景が有りそうである。

「ネーション」という語は、日本語では「国民」とも「民族」とも訳せる厄介な言葉である。日本語の語感では両者はかなり異なる。中国語でも、この点はほぼ同様と考えてよい。「民族」が運命共同体的で感情に訴える力を持つのに対し、「国民」は「国民の権利と義務」という用例に見るようにはるかに法律用語的色彩が強く理性的である。「ネーション」がこの様に異なる二つの語に訳せるということは、とりもなおさず「ネーション」すなわち近代の国民国家が、その両者を重要な柱として成立していることを示していると言えよう。フランス革命が理性の産物である『人権宣言』と、感情の産物である『ラ・マルセイエーズ』と共に生み出したように、国民国家は、普遍的で理性的な社会契約と運命共同体的で反理性的な民族感情という互いに矛盾するものどうしの協力によって成り立っているのである。中国もこの点、例外ではない。西欧近代の登場により、「中華」が「漢民族」となるのとほぼ時を同じくして、中国でも「国民」形成へむけての努力が開始されている。

1898年の戊戌変法の失敗後、日本に亡命した梁啓超によって『新民叢報』に連載された「新民説」、1910年代後半、軍閥支配の下で陳獨秀、胡適等が雑誌『新青年』によって展開した「デモクラシーとサイエンス」の「新文化運動」、これらはみな中国人を契約の主体たりうる市民に作り変え、中国社会に社会契約を導入して、近代にふさわしい国民国家へと中国を改造する啓蒙活動であった。しかし、その後の中国近代史の主たる流れは、この様な努力の延長線上にあったとはいえない。清朝を打倒してアジア初の共和体制を打ち立てた辛亥革命は「新民説」の立憲派より、むしろ種族主義的な「滅満興漢」の革命派の主導によって行われた。

「新文化運動」も「五・四運動」として政治運動と合体して高まりを見せた後、運動の中心は急速に、市民的自由・平等はブルジョワジーの階級的利益にすぎぬと批判するマルクス・レーニン主義に移っていった。

この点について、1980年代を通じて中国の思想界に大きな影響力を持ち、1989年の民主化運動にも大きな影響を与えたと言われる李沢厚は、その論文「啓蒙と救国の二重変奏」¹⁷の中で、次のように論じている。李沢厚によれば、啓蒙と救国とは中国近現代史を貫く二大テーマであり、両者は初めは共に携えて中国の社会改造を進めていったが、「五・四運動」の高潮を境に、それ以後は、次々と立ち現われる内外の難局の下、しだいに救国が啓蒙を圧倒しはじめる。

このように峻厳かつ困難な、長期にわたる政治軍事闘争、生きるか死ぬかという階級的、民族的大闘争において要求されるものは、当然のことながら、自由や民主といった啓蒙の宣伝ではなく、また個人の自由や人格の尊厳の類の思想を鼓吹したり提唱したりすることでもりえない。反対に、ここで突出したのは、すべては反帝に服従するという革命闘争であり、鉄の規律、意思の統一、集団の力であった。¹⁸

このように救国が啓蒙を完全に圧倒する困難な闘争を経て中華人民共和国は成立し、そこでは集団の力によって数々の変革が行われた。しかし、一方では個性を認めようとしない平均主義、家父長的で法律無視の人治主義等、前近代的な弊害が多く温存されることとなった。

この李沢厚の論が、中国近現代史的一面を鋭く抉ったものであり、1980年代の中国知識人の問題意識を見事に代表したものであることは言うまでもない。そして、ここから中国における「民族」と「国民」の関係も見て取ることができる。ここで言われている「救国」とは迫り来る危機にあたり「民族」を動員すること、「啓蒙」とは「国民」をつくりだすための改革、と置き換えて理解することができる。

すでに明らかかなように、中華人民共和国はその建国の過程で、運命共同体的な民族感情は大量に動員できたが、社会契約的な国民意識はほとんど動員できなかった。中国は国民国家として、著しく民族的側面に偏っているのである。すでに見たように、漢民族は民族としては、かなり漠とした民族ではある。しかし、植民地化の危機、東西冷戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中ソ対立と70年代いっぱい続いた中国をめぐる厳しい国際関係の下にあっては、漢民族の民族感情も国家統合において強い力を發揮し続けた。その反面、社会契約的な国民意識が育つ機会はそれだけ少なかったと言えよう。さらに、現在の中国にあって「国民」を強調することは、「民族」に依拠して形作られた共産党を頂点とする国家システムに対し、修正を要求することにもつながる。ここに、中国が多民族国家でありながら、しかもその主要民族が漢民族という本来漠然とした民族であるにもかかわらず、「国民」を避けて「民族」を強調する理由がある。

おわりに

中国は、その国家統合の資源をほとんど一方的に民族感情に頼っている国である。このこと

は国民国家としての中国の、意外に脆弱な一面を示している。中国の多くの民族論が「中華民族」の民族としての本格的自覚は、帝国主義の蹂躪のもとで生じたと論じていることからも明らかのように、民族意識は対抗主義的に形成されるものである。そこにどんな英雄物語が生まれようとも、その本質的受動性は免れない。しかし、冷戦体制崩壊後の中国をめぐる国際環境の変化のなかでは、対抗主義も以前のようには力とならない。また、市場経済の進展による旧来の地域社会の解体は、少数民族社会にあっては、そのことが新たな対抗主義を生みだし、それぞれの民族意識を高めることが考えられるが、漢民族社会においては、そのようなことは考えられない。「民族」によって国家統合を図ってきた中国は、今それを「国民」へと切り替えねばならぬ時にさしかかっている。

1 およそある民族の文化が、他の民族の文化に影響を及ぼし得るとすれば、それはその文化の持つ合理性、普遍性の成せる業なのであろう。その場合の合理性、普遍性とは、例えば次のような意味においてである。中国では清末以来、儒教の「三綱五倫」が、本来、自由・平等であるべき人間を分断固定し差別する非合理的なものとして度々批判の対象となつた。しかし、まったく上下関係の無い人間社会は在り得ないから、上下関係に一定の型を与えようとする「三綱五倫」は、その意味では合理性を有し普遍的役割を果たしている。「三綱五倫」という形式を持つことによって、人は具体的な顔と顔の人間関係を越えて組織を作ることが出来たのであるから。

WTO加盟問題に見られるように市場経済の進展の中では、漢族社会もグローバルスタンダードを要求される立場にあるが、少数民族社会に対しては、永く文明社会にいた漢族の持つ合理的側面が強く作用する。

2 中華人民共和国の憲法は1949年9月29日採択の『中国人民政治協商會議共同綱領』空始まって、54年、70年、75年、78年、82年と大きな改正だけでも5回行われている（このうち70年のものは中共9期2中全会で採択されたのみで全人大の採択には至っていない）現行憲法は82年憲法を基にその後数回小さな修正を加えたもの。

3 「中華民族」という語の使われ方の変化については毛里和子著『周縁からの中国』第3章第4節「中華民族論をめぐって」 東京大学出版会 1998年

4 司法部法学教材編輯部編 法律出版社 1997年 なお高等学校とは中国では高等教育機関の総称である。

5 『中国民族法学』5頁

6 同上

7 同上 6頁、なおこれは費孝通著『中華民族多元一体各局』（中央民族出版社 1989年）1頁から引用されたものである。

8 「中華人民共和国憲法」序言

9 この泥人形は、江蘇省無錫のものが有名であるが、他にも産地がある模様。ちなみに筆者の手元にあるものは、99年春に天津の南開大学に短期留学した学生が買っててくれたもので、天津製ということである。

- 10 前掲 毛里和子著 『周縁からの中国』 81頁
- 11 もっとも、この点はさらに考察を要する。中国の周辺民族の中には、大別して漢字文化圏（さらには属す可能性のある）集団と属さない集団とがあり、両者の中華に対する態度には、大きな違いがあることが考えられる。
- 12 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』校訂本第11冊 卷155 資料番号2-155-01
からの日語訳
- 13 朱淑媛「清代における琉球国の謝恩と表奏文書について」「第4回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集」（沖縄県教育委員会1999年3月）
- 14 朝貢システムの一般的解説としては、浜下武志著『朝貢システムと近代アジア』（岩波書店1997年）
- 15 実際、中国南方の少数民族の中には、民族意識の極めて低い集団もあり、中には民族としての認知を望まない場合もあるという。例えば、松本光太郎「海南島臨高人が“壮族”であると承認しない理由をめぐって」『東京経済大学人文自然科学論集』102号（1996年）
- 16 これは、どの民族にある程度共通して言えることであって、漢民族に特殊なことではない。国民国家の形成のため、民族意識が動員されるが、それは国民国家を創造するという自己変革の運動であるから、必然的に自己批判の要素を含んでいる。しかし、中国の場合、それはとりわけ深刻である。中国の場合、その民族形成に当たって、言語（地方語、いわゆる中国語は一般的に言う民族語には当らない）神話、叙事詩、伝説、民話といった歴史以前の、その解釈において可塑性に富んだ資源をあまり活用できぬ事情がある。これらを活用すると、漢民族そのものが、いくつかのエスニック・グループに分裂してしまう可能性がある。そこで「中国4000年の歴史」ということになるが、歴史は、神話などに比べると、解釈の可塑性に乏しい。それに、世界帝国にあった中国の歴史には、イノセントな悲劇的英雄があまりいない。
- 17 李沢厚「啓蒙与救亡的双重变奏」「走向未来」創刊号（1986年）『中国現代思想史論』
東方出版社（1987年）所収、邦訳は、坂元ひろ子、佐藤豊、砂山幸雄共訳『中国の文化
心理構造』平凡社（1989年）に所収
- 18 前掲『中国の文化心理構造』244—245頁